

“A ROSE FOR EMILY” 考察

91E 083 二瓶直美

作者ウィリアム・フォークナーは、南部名門旧家の出身である。彼はミシシッピ州に生まれ、オックスフォードに住み、その実在するオックスフォードを架空の町、ジェファソンとして、自分の郷土を多くの作品に描いている。フォークナーは子どもの頃より、南部特有の伝説、歴史、民話、会話、ほら話、皮肉なユーモアの中に育てられ、彼の創作のための主題や舞台を自ら学べる環境にいたわけである。当然、南部の過去と伝説は、彼の心をとらえて離さなかったが、彼の青年期における時期は、不自由のない生活を送ってはいたものの、北部産業主義に押しつぶされていく南部の姿を目のあたりに見て過ごさねばならなく、南部の伝統の喪失や、荒廃が身近なものとして実感できたのであった。これらの経験が彼の作品の中に強烈に表れているのを文面からうかがうことができる。

『エミリーへのばら』も、南部というあるひとつの地域の特異性が充分にでている作品であり、旧南部の栄華の名残と新しい南部との相剋のドラマともいえる。この作品は、短編ではあるが、わずかなページの間には長い年月の行き来があり、どちらかといえば古い時代に属している町の人たちの視点によって語られているものである。多くの作品でもそうであるが、フォークナーは記述的物語体という方式を用いている。すなわち読者を文体にひっぱり込んでそのまま閉じ込め、ごく小さな事実にとどまるまで無理矢理読者に記憶させておいて、結末にきてやっと物語全体が形をなし、事柄同士がお互いに謎を解き明かし合う段落になって初めて、このごく小さな事実の説明を与えるという方法である。おのおののエピソードの過去と現在の時間は、中断され、分解されながら最終的にはフォークナー独特の視点で三人称である語り手を通して述べられていく。

先ほども述べたように、フォークナーはオックスフォードを架空の町ジェファソンとして多くの作品を書いた。オックスフォードという町は「毒気のような過去の影」全体で包まれた印象を与える町であるという。それは過去と現在がもつれあった特異な世界を形成しており、『エミリーへのばら』の中でも過去にとりつかれている南部社会、またはその人々の姿をうかがうことができる。

エミリーはいつも「ミス」という敬称が語り手によってつけられており、そのエミリーが住んでいる家は1870年代特有の様式のもので、その町で一軒だけとり残されてたたずんでいる様子などは、父親に死なれ、グリアソン家最後の人となってしまったエミリーそのものである。エミリーの存在はこの町の人々にとって「ひとつの伝統、ひとつの義務、ひとつの厄介者」であった。町の人々はエミリーを世間一般の人とは別のものと信じ込んでいたのだ。30年前、エミリーの家から臭気が漂ってきてがまんできないという事態が起こった時、女たちはごたごたしている世間一般とお高くとまっているグリアソン家を結ぶ一種の共通点なのだからと別に驚かなかった。この時の人々の申し立てに対して判事は婦人にむかって悪いにおいをさせないでもらいたいなんて言えない、と言い切っており、南部の保守的な階級社会がよく表れている場

面でもある。町の人々は、グリアソン家は自分たちの真価以上にお高くとまりすぎていると思っていた。「ミス・エミリーは白衣のすんなりとした姿で背景に立ち、彼女の父は、彼女に背を向け、馬の鞭を握り、両脚を踏んばった黒い影絵となって前景をふさいでいる」といった「一個の活人画」のようにこの一族のことを考えていたのである。人々が考えていたこの絵は、エミリーと父親の関係そのものであったともいえるだろう。エミリーが30才になっても独身であったのは、彼女の女の一生を父親がかくもたびたびにはばんできたせいであったからである。しかしその父が死に、エミリーには屋敷しか残されなかった、といううわさを人々はいい気味だと喜んだ。きどっているグリアソン家の人間が一人きりになれば少なくとも「人間の道」というものを知るようになり、エミリーをやっとあわれんでやれると思ったのである。まるで不幸になることでエミリーが自分たちと対等な普通の人のような存在になるように人々は感じていたのだろう。

やがてエミリーは、ホーマー・バロンという男と知りあい、人々の目には結婚するんじゃないか、というように映る。この頃になると町の人々は一部を除いてこれを喜んで応援している。しかし、彼は北部人の日雇い労働者だから結婚するはずがないという昔ながらの南部独特の考えをまだ根強く持っている者もいた。グリアソン家の気取ったことや、年をとった女たちの考えの中には高い身分の人は、それなりの身分を保たねばならないという暗黙の了解があったからである。父親が生きている間はエミリーもきっとこの問題に悩まされてきたのだろう。父が死ぬと、今度は世間の目がある。このように映る自分の身分というものに、時としてはその威厳にうもれてはいるものの、生まれついた身分、自分の存在をうらめしく思ったこともあっただろう。ホーマー・バロンとの結婚は、彼女にとってグリアソンという家の貴族の名誉への反抗でもあり、そうすることによって人並みの幸せにひたれることができると思ったのではない。しかし、世間の人々は、エミリーが死ぬまでずっとエミリーの行動を（晩年はほとんど外出しなかったが）自分たちとは違う人種を見る目でうわさしあっていたのだ。

すると思っていた結婚もせず、砒素を買った後、ホーマーが消え、ついに彼女も死んだ時、人々は何十年ぶりにグリアソン家に入ることができた。そしてついには新婚の床のような飾りつけをして閉ざされていた部屋を開け、肉の落ちた笑い顔の、その肉体が寝台からひき離すことができなくなっていた男自身を発見するのである。また、その隣の枕の頭のくぼみと、その上の上のっていたひとつかみの長い鉄灰色の髪を見るのである。

ホーマーは砒素によって死に、その隣でエミリーが横たわっていたのだと考えるのが自然だが、その男がホーマーであるとかは、一切明確には書いていない。だからこそよけい読者にはミステリアスな印象ばかりが強烈に映り、単なるホラー小説なのではないかと思われやすい。しかしこの主人公エミリーの一生をたどっていくと、そうとはいえないのではないか。この短編でいちばん大きく浮かびあがってくるテーマは孤独な「女の一生」である。エミリーを中心に町の人を描きながら結局は、それは彼女の孤独をよりいっそうきわだたせる役目をしているのである。主人公であるエミリーに捧げられている鎮魂歌（＝ばら）といってもいいだろう。あまりにも厳粛すぎる規則というものがいかにして暴力、破滅へと導かれるかが示されている。過去の実在性の意識、生きた連続性の感覚、それらが描かれているのだ。

この作品においては、南部という特殊な地域性があらゆるところにあふれているわけだが、エミリーの葬儀の時「軍服にブラシをかけてきたものもあったが」とあるように、古い人々にとって南部は過去のままなのである。封建的社会秩序の上に貴族文化の花を咲かせたアメリカ

南部は社会の興亡を賭けて南北戦争を戦ったが敗れ、社会秩序を根底からくつがえされた時、ちょうど地震が時計の針を止めたように、南部人の精神の動きを止めたのであり、それ以来南部人の心は前を向くかわりに後ろばかり振りかえる、過去に魅入られた奇妙な社会ができあがったのである。

フォークナーの重要な主題のひとつは、人間は人間としてとどまるべく運命づけられているということである。過去から離れようと試みながら、人間は人間の本性を否定しようとしている。のがれることのできない人間の宿命が偶然人間の栄光に変わることもある。愛、時間と実存、罪意識、我執と物欲は人間存在の根源的な問題として提起されている。時間、記憶、満たされぬ愛、生と死、はこの短編の主題であり、フォークナー的である。たしかにエミリーは人々から見れば高貴な身分ではあったがあわれであったに違いない。しかし彼女なりに最後まで一人の男性を自分のものとして愛し、自分も時代とともに死んでいく、この一生はグリアソン家という名家の、また過去に輝いていた南部社会そのものに例えられるのではないだろうか。

〈参考文献〉

『ブリタニカ国際百科事典17』

大橋吉之輔『アメリカ文学史入門』研究社出版、1987年。

高橋正雄、佐伯彰一訳『世界文学全集32』講談社、1976年。

大島利治、高橋正雄訳『ノーベル文学全集11』主婦の友社、1971年。

小山敏夫『William Faulkner 短編の世界』山口書店、1988年。

高田邦男『William Faulkner の世界』評論社、1978年。